

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530461

研究課題名(和文)

少数文化地域と「内側のマイノリティ」

研究課題名(英文) "Minorities within Minorities": Inclusion and Exclusion of Ethnic Minorities in "Historical Regions"

研究代表者：

鶴巻 泉子 (Tsurumaki Motoko)

名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授

研究者番号：70345841

研究成果の概要(和文)：

本研究の目的はナショナリズム論で用いられる「シヴィックな志向性」対「エスニックな志向性」という社会類型から出発し、二つの「歴史的地域」—フランスのブルターニュ地域とアルザス地域—における移民統合の問題を考えることであった。しかし地域に実際に住む移民統合の問題を考えた場合、この二項対立軸の曖昧さ、ミクロ、メゾレベルの分析をするための不十分さが浮かび上がった。

研究成果の概要(英文)：

This research aimed to test the validity of the civic and ethnic model of nationalism through the analysis of the inclusion and exclusion of immigrants in two "historic regions" in France, Alsace and Brittany. The research results pointed out the ambiguity of the ethnic/civic dichotomy and the difficulty of applying it empirically into the micro and meso level analysis of discourse and actions.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：社会学、エスニシティ、地域主義、ナショナリズム、マイノリティ

1. 研究開始当初の背景

この研究はフランスのブルターニュとアルザスを例に、両地域が1990年代以降に見せる「新しい地域主義」の社会的志向性を、地域の「内側のマイノリティ」としての移民の統合問題に着目して考えようとするものである。それは現代の西欧少数文化地域に移民問題をもたらすインパクトを考えることでもある。本研究の問題意識は大きく次の3つに区別できる。

(1)「国家対抗的」「マイノリティ・ナショナリズム」から、「新しい地域主義」へ

この研究はいわゆる西欧の「歴史的な地域」の地域主義研究の流れ(Lafont, Hechter, Keating, 宮島喬, 梶田孝道など)に位置づけられる。1960-70年代の地域主義は国家という敵を持ち(A. Touraine)、対抗的分業(梶田孝道)に特徴付けられた。この認識に立った国内植民地主義論、相対的剥奪論、マイノリティ・ナショナリズム論の後、1990年代になると「新しい地域主義論」(Keating 1998)が注目されるようになる。新しい地域

主義論は特に制度的変化に着目し、自治体を中心とした行為者による①「戦略的」側面、②「ポスト・国民国家的」(M.Castel 2004)側面、③地域アイデンティティの「創られた」側面が強調された。この理論は現代の地域への関心の新しさ(都市的な性質、自治体や企業の経済的関心との結びつき、制度的行為者の参入)に光を当てるという利点があった反面、他方では制度的側面を強調するあまり、その大衆の基盤に関する分析や、制度的言説と大衆層の言説・実践の乖離については十分な注意が払われなかったという欠点があった。

(2)「脱国民国家的」研究視角の必要性

サパタ=バレロ (R.Zapata-Barrero 2006)やキムリッカ (W. Kymlicka 2000) が指摘するように、従来のマイノリティ・ナショナリズム研究は、わずかな例外を除き、移民問題をその分析の射程には入れてこなかった。地域主義はあくまでサブ・ステイト・ナショナリズムとして国民国家・EU 統合の問題枠で論じられた。他方では移民研究においても、「移民統合」は国民国家の問題であり、移民の社会化とは国民国家の規範に則した社会化であるという暗黙の前提が長く存在してきた。しかし実際には、独自の言語文化を持つ地域においては地域文化と移民文化は隣り合わせで表出し、差異に関する規範的な問題を提起する。本研究ではこのような地域主義や移民研究における伝統的パースペクティブ、すなわち国民国家のレファレンスを相対化し、新しい分析視座を探る一連の研究と問題意識を共有するものである(例えば R.Cohen 1997;小井土 2005)。

(3)これまでの研究射程とその限界

これまで筆者は、ブルターニュにおける新しい地域主義とマイノリティ同志の連帯を求める傾向について研究を続けてきた。60-70年代の国家対抗的地域主義と現代の地域主義との差異、大衆的・都市的基盤への着目に特に留意すると共に、現代のブルターニュの「モザイク的なエスニシティ」(鶴巻 2007)が若者達に個々人のレベルで選択され、カステルが「文化的コミュニン」と呼ぶミクロな価値共有集団を形成すること、そして若者にとって「マイノリティ」であることを発見することは他のマイノリティへ開かれた姿勢を生み出すことを確認した。しかしこの分析射程には次のような疑問に答えられないという限界があった。1ブルターニュで見られるマイノリティの連帯モデルはどこまで一般性を持つか。2国民国家というレファレンスや帰属意識はブルターニュ、あるいは他地域でも弱体化し続けると考えてよいか。3地域文化団体に「参加する移民」にのみ注目し非参加者を考慮しないことは、移民を不動の

ファクターとして考え、その独立要因としての側面を排除することになるがそれは妥当か。

2. 研究の目的

本研究で検討した仮説は、ブルターニュでは国民国家を介せずとも地域文化に移民が参加するプロセスが観察され、「ソシエタル」かつ「ポスト・エスニック」(Kymlicka 2000)な地域主義が現れているのではないかと、それに対してアルザスでは移民統合と地域文化の問題が切り離される傾向が強く、移民統合についてはより「国民国家重視的」で地域主義としては「エスニック」な志向性が見られるのではないかと、というものである。その仮説を、地方自治体と地域文化団体、移民文化団体への調査を通じて検証し、対照性が生じる要因を説明する努力をする。従来の地域主義研究に「内側のマイノリティ」という視角を導入することによって、多様性承認の問題は地域の内部からも提起されていること、さらに地域主義の志向性の違いには、地域と国民国家関係の歴史的文脈、EU 統合とグローバル化が地域にもたらす社会変動の違い、という二点が大きく影響しているのではないかと、という点を検討する。

3. 研究の方法

フランスのブルターニュとアルザスについて(：パリでの資料・文献収集も含む)、計5回の現地調査を行った。(補完的調査を2011年3月に予定していたが、直前の怪我のために渡航を断念した。)また、フランスの事例について参考にするために、やはり移民統合が大きな問題となっているスペインのカタルーニャに於いて、国内移民・国外からの移民数名へのインタビューを行うと共に、統計資料・新聞記事・論文等を収集した。調査期間・訪問都市は以下の通り。

2008年8月7日-8月29日パリ・ブレスト
2009年2月20日-3月30日パリ・ブレスト・ストラスブール
2009年8月10日-9月6日パリ・ブレスト
2010年3月10日-3月29日バルセロナ・ストラスブール・ブレスト
2010年8月5日-9月14日パリ・ストラスブール・ブレスト

ブルターニュとアルザスでのインタビュー対象者は市議会議員、自治体職員、警察、司法関係者、地区役員と住民代表、地区アソシエーション参加者、その他の住民など計30名あまりであり、これらの対象者に対しては半構造化インタビューを行った。また調査期間中は移民地区に住むか(：ブレストの場合)、住宅が確保できない場合は近くの地区に居

住しつつ（：ストラスブールの場合）、アンシエーション活動や地区行事への参加（ex. fêtes de quartier（地区フェスティバル）、fête du monde（世界言語祭））を通じた参与観察を行った。

4. 研究成果

新しい地域主義の言説はブルターニュにおいては移民の統合を積極的に推進しようという主張と結びついているのに対し、アルザスでは移民とは全く別の問題として主張されるか、あるいは極右政党・運動においては移民排斥の文脈で用いられることが多い。それについて、①地方自治体の文化政策との関係では地域文化はどのように移民統合と結びつけられるかを考え、次に②移民地区においては地域主義の言説や地域アイデンティティの主張はどのように現れ、どのように住民から受け止められているかを検証した。

(1) 自治体政策

<アルザス>

文化棲み分けの制度化:「地域文化枠」

地域レベルと県レベル（バ・ラン県）において、文化政策の中で地域文化関係予算とその他予算の切り離しが行われていることが特徴的である（ストラスブール市のみ例外）。アルザスの地域文化予算は「地域の言語と文化」という枠（地域の言語と文化に関わる一連の団体、組織、劇場、フェスティバルなどに関連）が別個に用意されているところが特徴的である。EU あるいは下からの「ヨーロッパ化」を後押しするような政策も特徴的である他、特に 2000 年代以降多発する人種差別事件を受け、人種差別について考えるイベントも催されている（バ・ラン県）。

<ブルターニュ>

連帯志向の文化を強調:「地域文化枠」なし、ただし「地域語振興」の強調

地域、県（フィニステール）、市（ブレスト）のレベルそれぞれにおいて、文化予算は「地域の言語 les langues de Bretagne」擁護を大きな柱の一つとしながらも、境界を取り払うことに主眼を置いている。連帯や平等の実現、持続的発展と文化発展を結びつけるプロジェクト、あらゆる領域での差別撤廃などが文化政策の中で主張される点が特徴的であり、この傾向は特に地域レベルで顕著である。

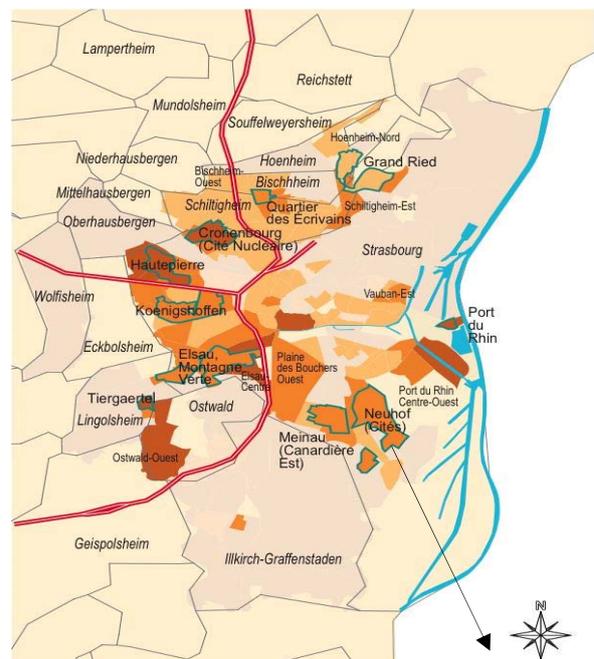
(2) 移民地区

調査対象地としてアルザスではニューオフ・シテ（Neuhof-cités, ストラスブール市）、ブルターニュではポントネゼン（Pontanézen, ブレスト市）を選択した。両地区は

「ZUS(Zone urbaine sensible, 「不安定区域」)」に指定されている。2011 年 5 月現在、全国で 751 指定区域が存在するが（：都市問題省のリスト <http://sig.ville.gouv.fr/Atlas/ZUS/>）、ZUS に指定された区域は一般に貧困・失業など社会問題が集積することで知られ、移民出自あるいは外国籍の住民が多く居住するが多い。ストラスブール市内の ZUS も例外ではなく、全て移民地区として一般に認識されている。ブレスト市では、3カ所ある ZUS の中でも、ポントネゼンについてのゲッターのイメージは特に強い。移民・外国人が多く住み、低所得層が多く、治安が悪いという社会的「評判」は両地区について同じように存在する。

ストラスブール市とニューオフ

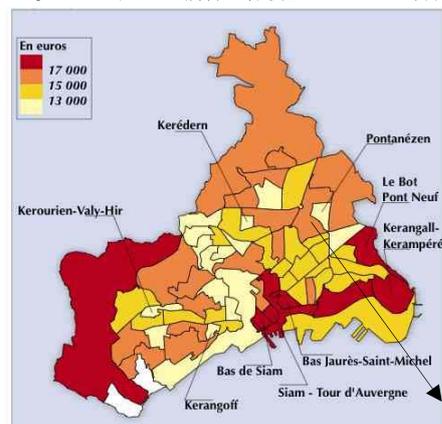
2005-2006 年労働力人口における地区別求職者割合（Chiffres pour l'Alsace - revue n° 45-46 - décembre 2008, INSEE）より。ニューオフは割合の最も高いカテゴリに属する。



ニューオフ

ブレスト市とポントネゼン

2001 年地区別年間所得 (Octant n° 99 octobre 2004, INSEE) より。ポントネゼンは所得が最も低いカテゴリに属する。



ポントネゼン

エスニックな排除

フランスではエスニックな出自に関する統計が存在しないため、(フランス国籍を持った)外国出自の人々がどれだけ集成的にある地区に住んでいるかを把握することは難しい。しかしニューオフとポントネゼンの統計から少なくとも「外国籍」の人々の割合が非常に高いことが分かる(：ニューオフ 25.3%、ポントネゼン 17.9%、表 1 参照)。エスニックな排除について考えるには、これにその第二世代・第三世代を加味する必要がある。ここで注意したいのは、ニューオフの外国籍住民の割合の高さ (25.3%)は国際的都市でもあるストラスブール市平均の 2 倍であるのに対して、ポントネゼン (17.9%)ではブレスト市平均の 8 倍近くになる点である。移民の歴史が非常に浅く外国籍の人々がそもそも少ないブレストにおいて、中心街に住む人から見ればポントネゼンは全くの「別世界」として浮かび上がる。

表 1

地域	アルザス		ブルターニュ	
	ニューオフ	ストラスブール全域	ポントネゼン	ブレスト全域
人口 ※1	11509 人	272975 人	3822 人	144548 人
外国人割合※2	25.3%	12.9%	17.9%	2.3%

Démographie, ZUS Neuhof-cités, ZUS Pontanézen, 2010, INSEE; ※1 2006 年人口調査; ※2 1999 年人口調査

外国人の割合を絶対数としてみればニューオフに劣るものの (25.3%対 17.9%)、地域社会から見たエスニックな排除の度合いは、むしろポントネゼンにおいて非常に強いということになる。

経済的排除

ストラスブール市の平均所得は 22.442 ユーロ、都市圏 CUS は 23.904 ユーロであり、15-64 歳の労働力人口における失業率はそれぞれ 15.4%, 12.8% (数字はすべて 2007, INSEE)であるのに対し、ニューオフでは平均所得が 9.315 ユーロと半分以下、失業率は 23.9%である。同じ年にブレスト市では平均所得 19.513 ユーロ、都市圏 CUB は 21.934 ユーロであり、失業率はそれぞれ 13.8%, 11.9%であるのだが、ポントネゼンでは平均所得は 8.272 ユーロであり、失業率は 26.1%に及ぶ (表 2 参照)。

統計のみを基準にした単純な比較はできないが、周囲の地区との隔たりという側面から見れば、やはりポントネゼンの方が排除の度合いが高いということになる。

表 2

ZUS	ニューオフ	ポントネゼン
年間平均所得 (ユーロ)	9.315	8.272
所得税非課税世帯の割合	63.9%	67.9%
25-64 歳労働力人口における求職者割合	23.9%	26.1%
HLM (低家賃公共住宅) 世帯の割合	82.5%	86.9%

Démographie, ZUS Neuhof-cités, ZUS Pontanézen, 2011, INSEE;数字は 2006 年調査

アソシエーション活動への動員と領域的所属

これらの地区において、地域主義的な言説はどのような影響を及ぼしているだろうか。文化アソシエーションに参加する人々は地域文化に対してどのような態度を示しているだろうか。

アソシエーション活動

両地域でのアソシエーション活動の全体的特徴として、人口規模が大きいニューオフ (11,509 人: 2006 年) では①ミクロ地域ごとの違いが大きいこと、②非行予防の活動に参加するアソシエーションのネットワークの重要性、③移民出自の住民の積極的参加が挙げられる。人口がニューオフの三分の一ほどであるポントネゼン (3,822 人: 2006 年) では、アソシエーションの数自体が少ないだけでなく①移民の出身国毎にアソシエーションが分かれる傾向が強いこと、②移民出自の住民の動員が非常に弱いことが指摘できる。移民の歴史が浅いブルターニュでは送り出し国との絆が深く残る点が影響していることが分かる。

ただし、地域文化との関連では、ニューオフではアルザス文化やアルザス語使用に関わる活動がほぼ見られなかったのに対して、ポントネゼンでは地域文化への思い入れが強い人々が積極的にアソシエーション活動に参加していることが特徴的だった。ただしこれらの人々は地区内には住んでおらず、移民出自ではない場合が殆どだった。

移民出自の住民から見た地域文化

この点に関しては両地区での違いは見られない。アソシエーション活動に参加している人であろうと参加していない人であろうと、地域主義言説に興味を示す人は移民出自の両親 (祖父母) を持つ層 (つまり第二世代以降) では皆無だった。「彼ら (ブルターニュ出身者) は私たちには関心を持ってくれないから (第二世代高校生)」。反感を露わにする人もあった。「地区フェスティバルにせっか

く（この移民の多い地域に来てもらおうと）アルザスのダンス・歌の団体を招待したのに、私たちの地区だと知った途端参加を断られた。一度了承しておきながら（地区の社会文化センターで働く移民二世世代の職員）」。

領域的所属と地域アイデンティティ

ただしブルターニュにおいて特徴的だったのは移民第一世代の動員の成功例だった。アソシエーションで活躍する第一世代の何人かは、自分をブルターニュ人だと主張して憚らない。逆に、「もっとブルターニュ人になるために」積極的に文化活動に関わるケースもあった。このような、地域人意識、地域アイデンティティ獲得における世代間の違いはアルザスでは見られなかった。二世世代以降において双方に共通したのは、領域的所属意識が「地区」と密接に結びついていることだった。地区はスティグマの場所であり、内面化された社会的アイデンティティの重要な構成要素となる。特に若者世代においては「あぶない地域」の出身であることが逆に自己主張の基盤となる例と、就職差別などを恐れて必死に隠す対象になる例と、完全な二分化の傾向が見られた。

以上から確認されたのは次の点である。

- a. 地域主義言説の中で他文化との連帯が強調され、そして人種差別事件・訴訟などが殆ど起こっていないブルターニュに於いて、むしろ移民地区の排除が顕著である、という矛盾が存在。
- b. アルザスでは確かに人種差別事件が頻発し、極右政党の支持者も一定程度存在し、地域アイデンティティがエスニックな性質を帯びる傾向が一部の人々に認められるものの、地区でのアソシエーション活動を見る限り、移民出自の人々の統合も（ポントネゼンに比較して）進んでいる。
- c. 両地区に於いて、移民二世・三世は「地域文化言説に無関心」という点で共通しており、地域文化に関する活動には動員されない。ただしブルターニュにおいては移民第一世代の中に地域文化に積極的に関わる例が多数見受けられる。

(3) 結論と課題

この研究では、ナショナリズム論（Smith 1986）で用いられる「シヴィックな志向性」対「エスニックな志向性」という社会類型から出発し、フランスの2つの「歴史的地域」における移民統合の問題を考えようとした。研究対象としたブルターニュ地域とアルザス地域では、制度的言説や人種差別の社会問題化という点から見れば、上記モデルに適合

する事例を提供すると考えられる。しかし実際に移民地区に住む住民とアソシエーション活動について統合の問題を考えた場合、この二項対立軸の曖昧さ、不十分さが浮かび上がった。特に注意したいのは、地域への愛着の強度という問題と、外部からの流入者への反感や排除のあり方は直接の因果関係を持たず、その連関の仕方は非常に複雑であるという点である。地域主義者の移民地区への積極的なコミットが存在する一方、移民地区の社会的排除の度合いが高いブルターニュの例はそれを端的に表している。

実際、近年、「エスニック」「シヴィック」の対立概念の操作性についての疑問や、そこに包含される暗黙の規範的価値の問題が指摘されている（Brubaker 2004）。他方では地域への愛着・地域主義やナショナリズムの強度と他者の排除の問題について、それが国民国家や地域社会のコンテキストに大きく左右されることが様々な事例を通じて指摘されている（上西 2002; Hussain & Miller 2006; Morales *et al.* 2009）。他地域の例とつきあわせながら概念の精緻化を進める一方、特に社会類型化にとどまるのではなく、メゾレベルでの統合プロセスの分析が必要となるだろう。

ブルターニュで第一世代の動員が見られたことは確認したが、同じように「地域文化への移民統合」言説が存在するカタルーニャでも、一部の都市において移民第一世代がカタルーニャ独立に賛成の投票に参加したことが話題になっている（"Los inmigrantes se suman al 'sí' a la independencia" *EL PAÍS*, 14/12/2009）。地域への愛着の強度やコンテキストに加え、世代間で動員の違いが現れる理由、また都市と準都市との違いも検討の対象となるべきだろう。

引用文献：

- R. Brubaker, *Ethnicity without Groups*, Harvard Univ. Press, Cambridge, 2004.
M. Castel, *Power of Identity*, 2nd ed. Blackwell, Oxford, 2004.
R. Cohen, *Global Diaspora : An introduction*, Univ. of Washington Press, Seattle, 1997.
M. Keating, *The New Regionalism in Western Europe*, Edward Elgar, Cheltenham, 1998.
小井土彰宏、「グローバル化と越境的社会空間の編成—移民研究におけるトランスナショナル視角の諸問題」『社会学評論』通巻222、2005。
W. Kymlicka, «Les droits des minorités et le multiculturalisme», in W. Kymlicka et S. Mesure (dir.), *Les identités culturelles*, PUF, Paris, 2000.

L. Morales et al., « Políticas de incorporación y la gestión del asocianismo de la población de origen inmigrante a nivel local », in R. Zapata-Barrero(coord), *Políticas y gobernabilidad de la inmigración en España*, Ariel, Barcelona, 2009.

A. Smith, *The Ethnic Origin of Nations*, Blackwell, Oxford, 1986.

鶴巻泉子、「グローバルな地域文化としてのケルト」『フランスにおける地域文化振興と社会構造に関する社会学的研究』科学研究費基盤研究 C(1) 7-17、2007.

上西秀明、「ベルギーにおける三空間併存時代のアイデンティティと極右問題」『国際関係論集』、42-70、2002.

R. Zapata-Barrero, *The Space for Immigrant Associations in a Multinational Context*, Working paper presented at the conference: Ethnic mobilization in the New Europe, april 21 & 22 2006, Belgium, University of Leuven, 2006.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 鶴巻泉子、「少数言語と新しい地域主義をめぐって」『言語文化研究叢書：言葉と文化の国際交流』巻無、査読無、2010、173-186.

② 鶴巻泉子、「誰に向けて発信するか」『アジア研ワールドトレンド』査読無、No.16、2010、8-10.

[学会発表] (計1件)

① 鶴巻泉子、『ヨーロッパ内の越境問題』シンポジウム「ヨーロッパのナショナリティとテリトリアリティ」2008年10月4日、於愛知県立大学。

[図書] (計1件)

① Motoko TSURUMAKI, “Autonomie journalistique et résistance aux cadrages imposés:l'exemple des incendies de voitures à Strasbourg”,in C. Lemieux (ed), *La subjectivité journalistique*, Ed. de l'EHESS, Paris, 2010.p315

6. 研究組織

(1)研究代表者

鶴巻 泉子 (Tsurumaki Motoko)

名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授

研究者番号：70345841

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし